

保育者のなやみ

舟木哲朗



幼稚園という、常識的には今まで女だけの職場と考へられていたところへ、昨年四月に飛込んでみた。これは、単なる好奇心からではない。幼兒は、家庭では父母の下にいるのに、又、男女混合の社会に住んでいるのに、幼稚園だけが男の教師がいけないという理由はない。否、男の教師が少しはいることが必要である。ソプラノばかりでなく、バスも聞きながら成長することが必要だ。将来は、幼稚園へ男の教師がどんどん進出すべきだ、というのがその大きい理由。更にもう一つは私自身の問題で、過去、小学校や中学校の教育に従事して来たが、教育の本質をつきつめようと思えば、

どうしても幼児期の教育にまでさかのほつて考える必要がある。しかもそれは、実際にやつてみないことはわからない。本を読んでみたところで、到底ほんとのことはわからぬものだ。このような二つの理由が私を幼稚園へ飛込ませる動機となつたのであるが、過去一年をふりかえり、幼児教育のあり方を考える時、一体これでよいのだろうかと考えさせられることがたくさんある。ここでは、その考えさせられることの一つを取上げ、先生方の御意見をうかがつたり御指導を仰いだりしたいと考えて、『』を走らせることにした。

ちほ とにかく子どもたちを相手に毎日を過ごしている。いつしょにおにごっこをしでやつたり、絵を描かせたり、歌わせたり……理くつ抜きにしてそれがとりもなおさず、幼児の成長発達を助長しているのだと。言い切ってしまえばそれまでだが、果してこれでよいのだろうか。何も幼稚園へ来ななくても、子どもは結構成長発達する。幼稚園へ出ない子どもに比べて、たしかに成長発達の度が高いというのでなければ、私たちの仕事はおよそ意味のないことになってしまうのだ。又、たとえ幼稚園時代に、幼稚園へ出ない子どもよりすぐれているように見えて、小学校入学当初気が利いてし

つかりしているように見えて、結局それが一時的な効果に過ぎないのなら、又幼稚園を出たために却って学習態度に望ましくない習慣をつけたとしたら、子どもが幼稚園教育を受けてしっかりと来て来たなどと、うぬぼれていられなくなる。現にあちこちの小学校でよくこのような非難の声もあるし、私自身も小学校にいた時そのように考へていた。しかし自分自身が幼稚園教育に従事してみれば、右のような非難が必ずしも正しくはないことはわかる。それは、小学校教員の教育技術にも問題があるからである。けれども又、それでは現在の幼稚園に於ける保育の実状は、小学校側から批判する余地のないような望ましいものであるかというに、決してそうは考えられない。

率直に言つて、私たち幼稚園教員は、保育を的確に行う「術」を持たない。ここに言う「術」とは、テクニックの意味ではなく教育の本質に立脚したところの、広く深いものを意味する。教職が一つの専門職である以上、それはだれにでもできるような通り一ペんの技術に終つてはならない。「確かに何も能がないから先生でもやろうか」といった類のものであつては困る。病人の診断や治療は医師の仕事で、絶対他の者の追随を許さないように、私たちの技術も、もつと権威のあるものでありたい。それは何もセクショナリズムに陥るのではなく、幼稚園という、特別に準備された教育施設で子どもを教育する以上、教師としての良心に訴えても当然のことであろう。若しそうでなければ、少し気の利いた子守と何ら選ぶところがない。こんなことを言うと経験を積んだ先生方から、「それはまだ経験が浅いからだ」と叱られるかも知れない。確かにそれもある。しかし、それだけでは片付かない問題だ。前にも書いたように、私は、教育に於ける技術をテクニックと解していない。病人に対する、看護婦の仕事としてではなく医師の仕事として解している。どうしたら歌をじょうずに教えられるかとか、どんなに話したら子どもがよく聞いてくれるかと

言った類の、子どもをうまく操つて行く小手先の技術でもなく、又、昔ながらの娘によつて、いわゆる御行儀のよい子を作るごとでもない。こんなことなら案外簡単だ。しかし、子どもを、未来のある貴い生命として、正しくすくすくと伸ばしてやるといふことは、口先で言う程容易なものではない。

「自由保育か一斉保育か」という問題が昨年の保育学会で取上げられたことは御承知の通りだが、子どもの自由を尊重しなければならないということは、理論的にはわかる。しかし又一方、集団生活に於ける規律ということも民主社会では欠くことができない。これを、あの自己中心的な幼児に実際にどのように調和させて行くか、言うは易くして行うは難い。子どもの興味や要求に副つた保育という場合、その興味なり要求なりが、人間として当然の、正常な、しかも教育的見地から見て正しいものであるか、又幼児期特有の、つまり、幼児が正しく成長発達するために内から起つて来る

当然のものだけなら別に問題はない。ところが現実には、環境の悪条件から来る、つまり幼児の内からではなく、外から来るものが非常に強く影響している。「お富さん」を歌えない子はないという現状だ。望ましくない方向への興味が強く、望ましい方向へはあまり興味を示さない子どもをどうするか。これも言うは易くして行うは難い。

一般に、幼児の自然性を重視し過ぎることは危険だ。解剖学的な研究によれば、人間は他の動物と違って、本能によって方向づけられているものは少く、環境なり教育によって、かなり変容を遂げることが明らかにされている。すると、幼児は既に家庭でいろいろな影響を受け、望ましい行動も望ましくない行動もいっしょくたに持合せている。それを、成長発達を妨げる条件を除去してやつて、すくすくと伸ばしてやるといった、のん気な考え方ではおれない。教師は当然子どもを、望ましい方向へ伸ばしてやるような、積極的な方策を立てなければならない。その方法上の問題で当然自由とい。

興味、要求の問題に直面する。又望ましい方向を決定するためには、教師は理想的な幼児像を描いて見なければならない。そうすると、そこには教師の人生観が入り込んで来る。イデオロギーも問題となる。イデオロギーに支配されない教育とよく言うけれども、一体今までそんな教育があつただろうか、又、現在そんな教育があるだろうか。教育史をひもとくまでもなく、戦後の教育改革は、イデオロギーがそうさせたのではないか。

以上、とりとめもないことを書並べたけれども、幼児期が大切な性格形成の時期である事を思えば、幼稚園の教育が軽々しくは考えられない。そして、保育の技術なるものがテクニックの域から脱却して、本質的なものに根をおろさなければならぬ。

いろいろと本を読んでみても、抽象的なことか、單なるテクニックに偏ることしか述べられていない。しかも、自分自身のやっていることにも、確固たる自信が持てない。これは私だけではなく、同じなやみを

持った先生方が、たくさんおられることが多いと思う。結論らしいものが書けなかつたが、はじめから私は結論がないので、広く先生方から御指導を仰ぎたく、敢てまとまらぬままにペンを走らせた。

(松江市折づる幼稚園)